

# 学力を伸ばす 将棋の使い方



重松 孝

はじめに

---

子どもたちの学力を伸ばそうと思ったら

先生の教え方とか

環境とか

そういうものよりも

最も大切なことは

子どもたちの基礎力を伸ばすことだ。

子どもたちの基礎力を伸ばす方法として

将棋を使うことができる。

将棋にはいろんな面があり、奥深いが、

将棋の教育的価値に着目した

教育将棋によって

学力を伸ばす方法を

この本で披露したい。

それでは、ご覧ください。

ソーシャル・グローイング・エデュケーター

重松 孝

お願いします

---

将棋の対局を始める時、

絶対しなければならないことがある。

それは

「お願いします」のあいさつだ。

自分を、相手を、そして周りを尊重し

気持ち良いあいさつで一局の対局が始まる。

私、あなた、そして社会を大切にする

思いと行動、どちらも大切だ。

気持ちの良いさわやかな「お願いします」からはじめましょう。

将棋をやってみませんか？

将棋を指したことの無い人に、

私がそう言っても、

かんたんに「やってみようかな」とはなりません。

駒がいっぱいあっておぼえるのが大変そう。

難しそう。

そういう心理的壁があります。

その壁を乗り越えて、はじめようとする気持ちがとても大事です。

うまくいかないかも、すぐにできないかも、対局したら弱いかも、めんどくさい……

マイナスを考えるとイヤになりそうです。

でも、やってみたら、きっと、今まで知らなかった世界に出会えます。

新しい自分を発見します。

私の指導経験上、はじめて将棋に挑戦した多くの大人の女性が、こう言います。

「いつもは使ってない頭の部分を使ってるみたい」

そして、やってよかったと言ってくださいます。

すぐにうまくできないかもしれませんが。

それでも、とにかくやってみよう！

と立ち向かって行くと新しい人生が開けているかもしれません。



## 立ち向かって行く姿勢2

---

とくに将棋は、負けると厳しさを感じます。

負けても負けても、立ち向かって行く、

つぎこそ勝ってやる！

そんな立ち向かって行く姿勢が大事です。

立ち向かって行き、乗り越えたとき、

大きな喜びがあります。

その繰り返しで、強くなっていくのです。

将棋を通じて、楽しさや悔しさを感じながら、

立ち向かって行く姿勢が

自然に身についてくるのです。

# 考える型

---

考える型を身につけておくと、ものを考えやすい。

ところで、もし今、急に、「さあ、考えてください」と言われたら、きっと、ビックリするだろう。

なぜなら、何を考えるかを明らかにしていないからだ。

このことは、考えることがわかっているても、

さらに、何を考えるのか対象をもっと具体的に考えることが重要であることも示してくれる。

さて、いま詰将棋を解く思考について考えてみよう。

まずは、問題をよく見て、

①今、どうなっているのか確かめる(状況把握)

②つぎに考えていくが、ふつうにするとうまくいかない(問題の所在)

③なぜ、うまくいかないのかをさらに深く考え、どうしてうまくいかないかを発見する(解決すべき課題の発見)

④この課題を解決する知識を自分が持っていないか探す(知識の探索)

⑤④で見つけた知識とともに解決策を考えていく(思考+知識)

⑥試行錯誤しながら解決策を見つける(試行錯誤)

以上の流れが、思考の大きな流れである。

このように、将棋から考える型を身につけることができる。





## 考える言葉

---

先ほどの詰将棋の解き方の考える型が身につくということは、

「今、どうなっているのかな」

「～しても、うまくいかない」「なぜかな」「どうしてかな」

「どうしたらうまくいくのかな」

「～したい、そのためには」

「使える知識はないかな」

など

考える言葉を持っているということだ。

考える言葉があると、ものが考えやすくなる。

もし、考える言葉をもっていないとしたら、考えられるはずがない！

いま、多くの子どもが、考える型や言葉を身につけずに、学校で学んでいるのではないだろうか？

もし、そうだとしたら、

早急に考える型や考える言葉を身につけることだ。

将棋なら遊びながら簡単に考える型や考える言葉を身につけることができる。

# 考える体力

---

将棋は、対局でも詰将棋でも、とにかく考える。

どう指したらいいかわからなければ、とことん考える。

考えて、考えて、考える。

それは、考えつづける鍛錬になる。

すると、考える体力がついていく。

考えることが習慣化し、考える楽しみを知る。

将棋で、考える体力がつく。

考える体力は、いろんな考える場面で、考えつづけることができ、役立つ。

論理的思考力は簡単に言えば

原因と結果を考え、思考を動かしていける力といえるだろう。

たとえば・・・

今、～したい。

しかし、できない。

なぜか。

一だからだ。

とすれば、一でなくせば、～できる。

ということは、・・・

また、こんな場合もある。

～と一を二つ合わせてみると

このような論理的思考を将棋では行っている。

論理的思考の習慣化で、論理的思考力がつく。

すなわち、将棋で、基本的な論理的思考力がつくと言える。

考えると言っても、知識がなければ、なかなか考えられない。

数学や科学には、公式や定理と呼ばれるものがあり、学生時代に記憶した経験がある。

もし、この公式や定理を知らなければ、問題を解くことは不可能に近いだろう。

これらの公式や定理は、才能ある歴史上の数学者や科学者によって発見されたものだ。

それらによって、人類は進歩してきたと言える。

公式や定理という知識は重要なもので、自分で発見しようとしても、そう簡単にできるものではない。

解法のパターンに入れば、これらの知識があれば簡単に解ける。

だからといって、これらの知識を憶えているだけでは、使い物にならない。

まずは、考える力、つまり思考力が必要だ。

考える力をまず身につける。

しかし、考える力があっても、知識がないとなかなか解けない。

だから、知識も身につける。

しかし、ここで大事なことがある。

思考を優先させることだ。

私の経験上、記憶を優先させると、思考できなくなる。

知識と思考は、脳の中の働く場所で、ぶつかり合って、うまく考えられなくなる。

しかし、私の経験上、思考を優先させると、知識は思考を助けてくれる。



## 個性を認め、力を合わせる

---

将棋の駒は、8種類の個性ある駒たちだ。

それぞれに良さを持ち、みんなで力を合わせる。

お互い違いを認め、お互いに尊重することが大事だ。

全部の駒が、それぞれの持ち場で力を発揮することで、勝利が近づいてくる。

そう考えると、将棋の中に、大切なものを発見するでしょ？

先生、最強の戦法は何ですか？  
と質問してくる子どもがいます。

そんな時、私は、  
「将棋は相手との関係性の中にあるので、何が最強とはなかなか言えないなあ」  
と答えています。

先生、なんで金で歩をとれるのに、とらずに角が逃げるの。  
先生が金で歩をとってくれたら、僕は飛車で金をとって、成ることができるのに！と怒る子がいます。

私は、「先生も必死。勝ちたいんや。君も勝ちたいように、先生も勝ちたい。自分勝手なこうなったらいいという考えだけで実現できなかつたら怒るというのは、あかんのちゃうかな。」と言います。

上記の2つは、経験上、大変よくあることです。

なぜか？

自分のことしか考えていないように私には思えます。

相手も自分と同じように勝ちたいというあたりまえのことに気づいていないのです。

将棋では、相手の存在を感じざるを得ません。

「棋は対話なり」と言います。

相手が指す手も考えることです。

自分がこういく、相手がこうくる、そこで自分がこういく、ということ、  
自分の勝手な考えでなくしっかりと考えることです。

「こういく、こうくる、そこでこう指す」を三手の読みと言い、将棋の基本です。

対話は、いろんなところで使える大切な考え方だと思いませんか？





勝つには、

一つ一つの駒が良くはたらき、

全体としても組織としての力を発揮することが大事です。

個が優れ、その個がバラバラでなく、うまくつながりあえる。

そういうことが大事なのです。

たとえば、銀を例にとってみると、

構えによって、右と左の銀の意味が変わります。

簡単に言えば、攻め駒か守り駒かで働き方が変わります。

他の駒も同様に、それぞれの働き方が違います。

組織の中で自分の与えられた仕事をきちんとこなすということは、

大変重要なことです。

個が役割をきちんと果たし、駒と駒がうまく組織力を発揮することが大事です。

初心者によくあるのは、  
あっちを指し、こっちを指し、中途半端であること。

せっかく攻撃態勢を備えたのに攻めなかったり、バラバラな印象があります。

直前の指し手を生かすことが大事です。

もちろん、相手のあることですから、方針変更しなければならないことはあります。

でも、方針変更しなくてもいいのに、あっちを指したり、こっちを指したり。

これでは、何をしたいのかわかりません。

まず、局面のテーマを探し、方針を立てることで。

今、何が大事なのか。

大きな骨太の方針が決まれば、それに沿って指していけばいいのです。

将棋の駒を組織の一人一人のメンバーに見立ててみると

一つの組織には、大きな一つ筋の通った方針が必要である。

しかし、状況の変化により、大胆な変更も必要である。

会社を法人と言い、ひとりの人間である如く表現します。

組織全体がひとりの人間であるがごとく、

それぞれの駒が力を合わせることであり、

そのような統一感のある方針を発表し、引っ張っていくことが

組織には重要であり、

このような態度こそ、リーダーとしてのよりよいあり方、リーダーシップである。

私は、そう考えていますが、いかがでしょうか？



# 負けました

---

将棋は、どうすれば勝ちかと言えば、相手玉を詰めることです。

しかし、相手玉を詰めたからといって、

大会で、

「はい、詰みました。ぼくの勝ち！」

とガッツポーズで勝敗の報告に席を立つのは正しくありません。

詰めれば勝ちですが、負けた人が「負けました」と言って終局になるのです。

相手が「負けました」と言うまで、勝った人が「勝った」とは言いません。

負けた人が負けましたと投了するまで(投了：将棋で負けましたと言うこと)、待つのです。

と同時に、負けた方は、ハッキリと「負けました」と言うことが重要です。

負けた人が、自分で自分の負けを認めて、終局になります。

負けた人が自分で負けたと言うことで終わるとするのは、たいへん厳しいことでもあります。

しかし、TVで見ていると、強いトップ棋士の負けましたは、はっきり言っているようです。

負けをはっきり認める「負けましたは」は、敗戦をしっかり受け止め、

つぎへのエネルギーになっているのではとさえ思います。

## かたづけ

---

きちんと駒数、駒の種類を見て、かたづけましょう。

駒は、王将1枚、玉将1枚、飛車2枚、角2枚、金将4枚、銀将4枚、桂馬4枚、香車4枚、歩18枚、あまりの歩があればその数、歩が1枚または2枚、です。

きちんとかたづけないとつぎの対局ができません。

ずっと使いつづけるために、駒をきちんとかたづけましょう。

ありがとうございました

---

負けましたと言って終局になった後、感想戦をすることがあります。

感想戦とは、実戦ではこう指したけれど、

もし、この手(考えたけれど指さなかった手)だったら、どう指しましたか?とか、

この手は厳しかったです。この手は、ほんとうにいい手ですね。とか。

そういう感想の対話をするのです。

この感想戦で、対局した一局が、さらに深く考えたり、印象を残すことができます。

このように、終局後、感想戦を終えて、最後に

ありがとうございました

と感謝の言葉を述べます。

「お願いします」「負けました」「ありがとうございました」という言葉で、ハッキリと心を表現することが大事です。

学力を伸ばす将棋の使い方と題して、お話ししてきました。

すこしでも、将棋の教育的価値を伝えられたらいいのですが。

ぜひ、子どもの学力を伸ばす方法の一つの選択肢に入れていただければと思います。

参考にしてください。

☆YouTubeで公開中 《将棋》S式・強くなる詰将棋入門前編・後編

S式・強くなる詰将棋①②

TAKASHI先生の学力アップ将棋講座①～⑩

【強くなる 将棋】または【S式 将棋】で動画を検索すると、上位に出ます。

【学力アップ 将棋】なら、TAKASHI先生の～が上位に出ます。

☆ブックログのプザーで将棋道心得を無料公開中。

◎私の手を借りたいと思われる方は、ご相談ください。

私は、今、大切な多くのことが将棋だけでかなり解決できると、

将棋指導で子どもたちに接する経験上、確信しています。

私は教育的価値のある将棋を「教育将棋」と名づけました。

(詳しくは、拙著「ほんとうは教えたくない将棋の力」に書いています。この本は、公益社団法人日本将棋連盟関西販売部、紀伊國屋書店福岡本店、ゆめタウン博多店、鹿児島店で購入可能。)

フェイスブックページやアマゾンで数ページ中を見ることもできます。

学校の授業に使いたい、先生の研修に使いたい、将棋で子どもたちの力を引き出してほしい、将棋で心を育てたい等ご相談があれば、ご連絡ください。

自分で考え行動し、新しい問題に立ち向かって行く人間を育てましょう。

重松孝

教育計画研究所 所長

よか出版 代表

日本発達心理学会会員

公益社団法人日本将棋連盟公認将棋指導員

連絡先 090-3606-4273





## 学力を伸ばす将棋の使い方

<http://p.booklog.jp/book/87691>

著者：重松 孝

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/iihonkakitai777/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/87691>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/87691>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ